
宇宙を駆ける光

しらすお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙を駆ける光

【Nコード】

N1515A

【作者名】

しらすお

【あらすじ】

民間軍隊の『スペリオル』に所属するカイトと同僚のエルク、だがこの二人の運命は修練艦が襲われた事により大きく動き始める

プロローグ 未知なる者

グガアアッ!!

船内に響く爆音と衝撃――

「なんだ!?!?どうなっている!?!?」

『スカイブルー』の船長代理レウスは思わず叫んでいた。

何時もどおりの哨戒を終え『スカイブルー』は帰路へとついていた。その途中、発見された一隻の正体不明艦――難破船かとも思ったが救難信号もでておらず通信を入れても応答が無いため

軍本部に報告しようと連絡を入れようとしていた時の事だった、

「ア、アンノウンからの砲撃かと思われます!」

悲鳴に近い声でオペレーターが叫ぶ、

「馬鹿な! 射程距離外だぞ!?!?」

ありえない事だった相手がテロ組織などだった場合を考え射程距離外に待機していた――はずだった。

しかし、今しがた正体不明の艦はその常識を打ち破り射程外にいるはずの『ブルースカイ』へと砲撃をしてきたのだ。

「うろたえるな! 確かにアンノウンからの砲撃は届く様だがこの距離なら十分に回避は間に合う!」

怒鳴るようなレウスの声がブリッジに響いた。

その声と共にブリッジのどよめきが鎮まる、

「とりあえず、本体との連絡を取り応援を要請しろ!」

「り、了解。」

乗組員の不安を弾くかの様に叫ぶレウス、

.....

「ジャミングが発生している様です、通信不能!」

「くっ.....!」

「艦長ここは撤退をした方が.....」

「艦長代理だ! それにジャミングされていると言う事はこちらを逃

がしてくれるつもりは無いという事だ、さっきの砲撃からしても相手の艦の能力はこちらより上——ならば速度でもこちらが不利な可能性が高い

追いつかれるのがオチだ、撤退はありえん！」

レウスはあえて『撃沈』という言葉は使わず『不利』という言葉に置き換えた。

『撃沈』と言う表現はあまりにもマイナス的なイメージが強く士気に関わると判断したからだ、レウス自身はリーダー役を嫌っているがその気持ちとは裏腹にリーダー向きだったりした、

艦長代理をしているのも『ブルースカイ』の艦長が先週急死した為であり、それが知り合いの父親などでなければレウスは受ける気など毛頭なかった。

「で、ではどう対処すれば……」

「前進しろ！こちらの射程範囲内に持ち込む！」

「了解！」

オペレーターの声と共に『ブルースカイ』が加速する。

加速を始めた『ブルースカイ』に向けて正体不明艦は砲撃を浴びせはじめる、しかし距離がある為『ブルースカイ』はその砲撃をことごとくかわす。

「射程内に入りました！」

「よし！主砲二番、三番撃てっ！」

ゴウウン！ゴウウンッ！！

レウスの指示と共に『ブルースカイ』の主砲が放たれる、

「目標、回避！アンノウン艦砲撃を続行中！」

——妙だな…敵の動きが単調すぎる——

レウスが違和感を感じ取るが答えを出すより早く——

グガアアッ！！

敵艦の砲撃が『ブルースカイ』に命中した。

「何処をやられた！？」

「右舷、Bブロックです！」

——やはり、そう簡単にはいかんか……

「先ほどと同じく二番三番発射、その一秒後に一番四番発射！」

レウスの指示と共に再び主砲が唸る、

再び放たれた砲撃は一度目は避けられ、二度目はバリアを展開させ防がれる。

「アンノウン、ダメージ評価ゼロです！」

兵士の悲痛な叫びの報告がレウスの耳に届く、

——どうすればいい、一体なんなのだアレは！？——

レウスが考えをめぐらせているその時、驚くべき報告が耳に届く、

「敵、リーダーからロスト（消失）しました！」

「なにっ？ 離脱したの間違いでは無いのか！？」

「いえ、ロストです……ですが……」

「なんだ？ 言わねば分らん！」

レウスは怒鳴り兵士に報告を促す。

「アンノウンからの通信です、読み上げます……」

『我、再び現れるとき、その時こそ終焉の宴始まる時』

……………

ブリッジにはどよめきだけが渦巻いていた——

宇宙を駆ける光

「なんで俺が訓練生の修練艦に乗らなきゃいけないんだよ……まったく、戻ったら隊長に文句の一つでも言っただけでやらなきゃ気がおさまらん」

修練艦『ベルメイ』その廊下を格納庫に向かって歩く二人の少年、ぼやいた少年の髪は短髪で青、顔はハンサムの部類には入るが、いかんせん目つきが悪い、服装は軍服をビッシと着ている、

「カイト、そう言うなよ、ここで訓練生の女の子と仲良くなるとか、もう少し前向きに考えれば良いじゃねえか」

そう言った少年はカイトと同僚のエルク、同じ短髪で髪の色は茶、顔にはにやけた笑みを浮かべている、コレさえなければ二枚目なのだが本人は気づいていない。

カイトと同じく制服を着ているが少々だらしがない。

「それは前向きの内に入らんぞ……少なくとも俺はな」

呆れた口調で言うカイト

「あ、ヤベ、機体の調整まだだった……実践訓練何時からだっけ？」

エルクの問いたため息をつき

「十五時からだよ、ってかお前、時間くらい——」

「もう二時間しかねえじゃねえか、すまん！また後でな」

エルクはそう言い残し、廊下を走り去って行った。

——まったく……アイツは——

宇宙西暦——三百二十一年

人類が宇宙へと進出してから約三百年余り——

人々は惑星を開拓し、人類は新たな一步を踏み出した。

五十年程前はアース連合とスティア国の間での紛争『ヘルマン投戦』があった——

しかし、双方の戦闘は一進一退の攻防を繰り返して、決着がつかぬま

ま休戦。

そして――時が経ち、人々は戦争を忘れ、傷跡だけが残り、軍備は縮小されていった、

しかし、戦争の影響で治安は悪化の一途を辿っていた。

アース連合国の考えた対策は――私立軍隊を設立させる為の法律を成立させる事。それは、設立時の審査と定期的な報告書を出しさえすれば民間でも軍を設立する事ができる、という内容のものであった。これにはスティア国が反対するかと思われたが双方の抱えている問題は同じだったらしく、

これを快諾、

当初は、浸透するか不安に見られたのだが、今では企業の警備から、テロリストの襲撃までこなし

今では一企業として根付いている、そして――

カイト達も民間軍隊の一つ『スペリオル』に所属している。

「いいか！弾はペイント弾だが、実践と思って戦え！」

『はい！』

「それでは今から演習に入る！」

訓練教官と訓練生の声が格納庫に響く、

そして、訓練生は指定されたギアに登場し始める。

――人動兵器ギア（GEAR）――戦争が生み出した、戦艦、戦闘機に代わる新たな兵器

戦艦には無い機動性、戦闘機の欠点であった行動時間や戦闘能力――これらを凌駕したギアは瞬く間に戦闘の中心兵器へと代わっていた。

今回のカイト達の仕事は訓練生たちが訓練中域外に出ないように見張るためだけの地味な仕事、

「ふぁーっ…ねむう…」

既にカイトとエルクは宇宙（外）へと出ていた。

「お前が遅くまで起きてるからだろ。」

通信モニター越しにカイトはエルクに言う。

「お前は、いい子過ぎるの、男と女の時間は夜だよ夜。」

「あのなあ…って、言っても無駄か、それよりちゃんとレーダーで訓練生の位置確認しとけよ、ミスしてもかばってやらんからな。」

「わあってる、にしても、この機体ずいぶん旧式だな…」

DZ社製機動ギア、『フォルス』——機体自体は悪くないのだが、十年以上前の旧式で色んな所にガタがきている。万が一の為武装がしてあるが貧弱で一世代前のヒートサーベルと装填数の少ないアサルトマシンガン程度の武装しかない。

「それより、主役の登場だ」

カイトが言うと、修練艦『ベルメイ』から訓練生の機体が発進してくる。

「量産型の『フェイ』か、俺たちより良い機体じゃねえか…」

「訓練生なんだ、そこはしょうがないだろ」

ぼやく、エルクをなだめるカイト、視線をレーダーに戻す。

「ん？レーダーにBクラスの物体が映ってる確認できるかエルク？」

「ほいほい」

エルクはそう言いコントロールパネルの上で手を動かす。

「みる限りじゃ戦艦だな、識別コードは…出してないな…何処の所属の戦艦だ…？とりあえず通信してみる」

……………

「応答なし、一応警告してみたが何の反応もな——っ！——」
突然エルクの顔色が変わる。

「正体不明艦から艦載機発進を確認！数四！あいつ等ここでドンパチでも始める気か！」

エルクの報告にカイトは舌打ちし、『ベルメイ』への通信回線を開く。

「こちら、カイト！こちらにアンノウンが多数接近中！」

「な、なにっ！何故こんな所に！？」

悲鳴に近い声をあげる艦長――

「そんな事言ってる場合じゃありません、その艦にはマトモな装備は無いんです。訓練生を戻し撤退してください！」

「わか――ブツ」

カイトは艦長の返事を待たず通信をブチ切った。

――修練艦が撤退するにはそれなりに時間がかかる、今外に出てるギアで武装をしてるのは俺とエルクのだけ――

「エルク、俺たちはどうやら、時間稼ぎしなきゃならないようだぜ」

「あーあ、面倒な事になっちまったなあ……」

「行くぞ、エルク」

そう言い通信モニターを切るカイトだが、再び画面が瞬いた――

「なあカイト、危険手当……降りるよな？」

「知らん」

陰謀の宇宙

「戦闘機ごときじゃ俺は落とせないぜ！」

言って、戦闘機のミサイルをことごとくかわすエルク、

いつもは冗談ばかり言っているエルクだが、ギアの操縦者としては一流である。

ドゥン！

エルクが撃ったアサルトマシンガンが戦闘機の一機に直撃し爆発を起す。

「よし、まずは一機、さあて次は——」

「待て、エルク、新たな反応だ」

そのカイトの言葉通り一機のギアがこちらへと接近してくる。

「ギア一機だけ？ 何考えてんだあいつら？」

「さあな、よほど自信があるんだろうな」

そう、カイトは言いつつ、飛んできたミサイルをかわし、通り過ぎた戦闘機をアサルトマシンガンの一撃が葬った。

修練艦『ベルメイ』は未だに訓練生を収容に手間取っているのか撤退を開始していない、

——ああ、くそっ！ 何時までモタモタやってんだ！ 早く撤退しろって！——

心の中でぼやくエルク、

「来たぞ！」

カイトの声と同時にモニターに映し出されたのは、黒で統一された機体——デルベス社製機動ギア『ウルフエン』

この機体も旧式の機体ではあるがカイト達が乗っている機体より少々性能は高い、見れば、あちこち改造を施された跡もある。

「さしずめ『ウルフエン改』って所か……」

機体をモニター越しに見てエルクが言う。

『ウルフエン』がレーザーソードを抜き、カイトの方へと迫る。

アサルトマシンガンで応戦するが、かすりもしない。

「ぐっ！速い！」

たまらずカイトはヒートサーベルを構える、が――

バジュッ！

しかし、『ウルフエン』のレーザーソードはヒートサーベルをあつさり叩き斬った。

その隙を狙い『ウルフエン』に狙いを定めアサルトマシンガンをエルクが撃つ、避けられるタイミングでは無い――

しかし、サイドスラスターを噴射し、なんなくかわす。

「おい、おい、ほとんどウエイトがないじゃねえか！どうなってるだ！？」

驚愕の声をあげるエルク。

――ウエイト――機体を次の行動に移すときどんな機体でもコンマ単位ではあるが動きが止まる一瞬があるのだ、タイムラグと言うやつである。

しかし『ウルフエン』の性能を考えた場合あのタイミングでかわすのは考えにくい、いくらパイロットが優秀でも機体が反応してくれないはず、

無論、改造してある事も踏まえてである。

ドウッン！

「――っ！――」

『ウルフエン』に気を取られていたエルクの機体に戦闘機の攻撃を受け、機体とエルクの意識がぶっ飛ぶ。

「っ……だああっ！またメカニクスの奴らに文句言われるだろうがっ！」

意識を強引に戻し、エルクは戦闘機をアサルトマシンガンで二機まとめて撃ち抜いた。

それを見て、あなどりがたしと思ったか、『ウルフエン』が目標を

エルクに変える。

「このっ！」

パス、パス――

言って、マシンガンのトリガーを引くエルクだが、虚しい音だけが響くのみ。

どうやら、弾切れの様である。

「うどわあああっ！弾切れかよっ！このオンボロッ！」

絶叫しギアに八つ当たりしながらも、ちゃんと回避行動をとり、なんとかさけるエルク、

そこへカイトが折れたヒートサーベルをブン投げる。

しかし、かわされる――が、カイトは間を置かずにアサルトマシンガン撃つ、

これなら！――

そうカイトが思ったのも束の間、

ガガウウン！

いともあっさりシールドで防がれる。

言っておくが『フォルス』にはシールドなんぞ装備されていない。

「ああ、くそっ！ちゃんと当たったのによ！」

何故かカイトではなくエルクが悔しがる。

「機体性能の差か……」

「なに、冷静に分析してんだよ！このままじゃジリ貧だぜ！」

冷静に言うカイトにエルクがツツコミを入れつつアサルトマシンガンのマガジンを入れ替える。

『ウルフェン』が加速し今度はカイトの方へと動く、が――『ウルフェン』は何かを思い出したかの様に翻し、戦艦に収容されると、しばらくするとレーダーから消えた。

カイトとエルクはしばしその場で呆然としていた。

……………

「なあ、労災や危険手当――」

「知らんっ！」

エルクが言い終わるより早くカイトは一喝し——口調を冷静なものに戻し。

「それよりどうするんだよ」

カイトの言わんとしている事が分からずエルクは眉をひそめ。

「隊長に機体ぶっ壊した事の上手い言い訳を考えると何か？」

エルクの言葉にカイトは呆れつつ。

「あのなあ……そういう事じゃなくて、修練艦が無いのにどうやって基地に戻るんだよ？」

言われ、エルクはモニターを見るが、修練艦があつた場所にはただ虚空が広がるばかり。

ギアを使って戻るなど問題外、途中でエネルギー切れになるのがオチである。

「ど、どうすんだ……」

冷や汗をだらだらたらしながら言うエルク。

「救難信号出して待つしかないな、運がよければ助かる。」

「ああああああああっ！！どうすんだよ！！」

「どうするって待つしか——」

と、言おうとするカイトだが——

「明後日、俺デートの約束してたのにっ！」

「そっちの心配かよっ！」

カイトはエルクの理不尽な言葉に思いっきりツツコミを入れるのだ
った——

スペリオル

——民間軍隊『スペリオル』エレス星系基地——『ソリオン』全長五キロの基地で、規模は『スペリオル』の基地では中間の位置にあたり、カイト達が所属する第二師団もここに駐留していた。

「報告は以上だな？」

そう言った男は歳の頃なら三十台前半、黒髪で体はがっちりしており、

目つきが鋭い為か年齢にしては渋い印象を受ける。『スペリオル』の第二師団の師団長でありカイトの上官でもある。

「はい、以上です、エルセント隊長」

そう返事したのはカイト、隊長と呼んでいるのはカイト達がまだ新兵だった頃エルセントが部隊長だった頃の名残で

本人も呼び方はそんなに気にしてはいない為、未だに隊長と呼ばれている。

シュッ——

鋼鉄製の自動扉が開き、入ってきたのはエルク。

「遅いぞ、エルク」

「そんな事言わないで下さいよ隊長、コッチは宇宙空間で三日も漂って、ついさっき救助されて帰ってきたんですよ、もうチョット気遣いってもんが——」

「ならば、命令違反で営倉行きにしてほしいのか？」

冷静に言い放ったエルセントの言葉にエルクの顔がまともに引きつる。

「え……いや、それは……」

……………

「すいませんでした……」

沈黙ののち折れたのはエルクだった。

独断で修練艦の撤退を命じ、無許可による戦闘、なおかつ機体の損傷——これだけの事をしてエルクとカイトが営倉行きにならなかったのはエルセントが修練艦が無事な事を理由に処分相殺を申し出たからである。

「エルク、報告書を明後日までに提出しろ、いいな」

「はい……カイト一緒に書こうぜ……」

「俺はもう提出した」

「……え？……戻って来てから書く暇なんてほとんど無かっただろ！？」

カイトの言葉に驚きの声をあげるエルク。

「救助される前にほとんどの事はまとめておいたからな」

「なにい！？先にお前だけ書くなんて！お前の中に『仲間を思いやる』って言葉は無いのか！」

「そんなもん知るか」

「日頃の行いが悪いからだ」

しくしくしく——

二人同時に言われ、エルクは涙するのだった。

「それよりもお前たちに新しい任務だ。」

エルセントは資料を取り話題を転換する。

「ええ……休暇は——」

言おうとしたエルクだが、エルセントの視線に気づき口を噤んだ。

「任務の内容は、機体の試験運用——」

「……げっ！……」

内容を聞き小さく呻くエルク。

「何か言いたげだな？」

エルセントの問いにエルクはため息をつき。

「そりゃ、そうでしょ、機体の試験運用って事は実験機でしょ？嫌ですよそりゃ、まあ、仕事だからやりますけど……」

そう、実際の所、実験機は実験機でしかなく、安全は保障されてい

ない、過去にもパイロットが死んだ——という報告はさすがに無いが、

突然エンジンがトラブルを起して操縦不能になったり、何かの要因でエネルギーが逆流して武器や機体の一部が爆発したりしてそのショックでパイロットが再起不能になったりと、あまりいい報告は無い。

「カイトもいいな？」

「了解です」

「では、詳細は二時間後、Cブロック第三格納庫にて行う——では解散」

そのエルセントの言葉でカイト達は師団長室をを後にした。

「クレス大尉、ベルゼン大佐が呼びです」

そうクレスが呼ばれたのは、任務を終えて『クレスタ』基地に戻って二日目のことだった。

……やれやれ、報告か？だとしたらベルゼン大佐も気の早い事だ：

「分かった、すぐ向かうと伝えてくれ」

心の中でそう思いながらも、クレスはそう言いい、兵士は敬礼し去って行った。

「どうだ、『ウルフエン』の調子は？」

クレスが部屋に入室した後、そう言った男は年齢なら六十過ぎ、白髪で、きゃしゃな体つきではあるが、その動作に年老いているという感じはあまり無い。

「ベルゼン大佐、『ウルフエン』ではなく『タイプ01』の方でしょうか？」

「どちらでも構わん、それより『ウルフエン』のシールドに付いていた弾痕——あれはなんだ？」

ペルゼンの言葉にクレスは表情を変える事無く、

「チョット腕と勘のいいパイロットがいましたね」

「それにやられた——と？」

そのペルゼン問いにクレスは首を縦に振った。

「やはり試作段階ではその程度か——やはりまだ力不足か……」

——馬鹿な……今の段階でもあのシステムを使った機体の性能は現在あるどの機体よりもずば抜けている、それで力不足？ どういう事だ？——

クレスは思いを巡らせる、興味はあるが、あまりいろんな事に突っ込むのは

自分の立場を悪くするだけ、クレスはそう判断した。

「聞きたい事は以上だ、下がれ」

「はっ」

クレスは疑問を抱きつつも敬礼をし部屋を跡にした。

青虎と緑龍

「隊長、これすっか、実験機って？」

「そうだ」

『ソリオン』Cブロック第三格納庫——集合したエルクとカイトは実験機をまじまじと見上げていた。

実験機は二機あり、一つは青を主体とした色の機体で両腕にツメがついており、腰には中距離戦用のレーザーライフルが装備されている。

もう一機は緑を主体とした色で後部に大きな二つの筒を背負っている、おそらくフロントに移動させ遠距離砲として使うのだろう。

腕部には固定してあるビームカッターがついており、腰には同じく中距離用の武器が装備されているがこちらは実弾式の様だ。

「見たところ——青い虎の方が近距離戦闘用で緑の龍が遠距離戦闘用って、とどこですか」

「なんだ、その『青い虎』と『緑の龍』ってのは……」
半ば呆れた顔で言うカイト。

「いや、頭部みて見ろよ虎と龍だろありゃあ」

エルクの言葉で二機の頭部を見上げる——確かに頭部はそれぞれ虎と龍の様な形をしている。

「まあ、確かにそう見えん事も無いが……」

「虎だろうが龍だろうがどうでもいい、問題はどちらがどちらの機体に乗るかだが——」

エルセントはそう言い資料をめくる。

「カイト、お前が『シュテッケン』に搭乗しろ、エルクの言った青い虎の方だ」

「はい」

「じゃあ、俺はコッチの緑の龍ちゃんっすね——って、これの名前はなんですか？」

「『イグニス』だ」

「りょうかい」

返事をするエルクとカイトはそれぞれ機体のコックピットにもぐり込む。

「エルセント師団長」

「なんだ？」

機体の説明に入ろうとしたその時、エルセントは一人の兵士に呼び止められた

「……………」

「……………」

兵士は耳打ちをしているのでカイト達には聞こえない。

エルセントはマイクのスイッチを入れ、

「お前たち、ここで待っている、すぐ戻る」

そう言う格納庫の分厚い扉を開き兵士と共に出て行った。

「エルク、とりあえず、システムのチェックするぞ」

「はいはい」

「クレス、どうした？浮かない顔だな？」

そう言ってカウンターの隣の席に腰を掛けたのはクレスの同僚であるセブ、

クレスはペルゼンに呼び出された後、一人で『クレスタ』基地内にある酒場に飲みに来ていた。

「そうか？」

「ああ、そんな感じするぜ？」

「だったら気のせいさ」

そう言い、クレスはグラスの水割りを一口。

「そうか、ならいいんだがな——それにしても、大変だな、お前も『タイプ01』のパイロットに選ばれるなんてよ」

そう言いセブはボトルに入っているウィスキーをグラスに注ぐ。

「そう言うお前も『タイプ01』のプログラムデバッグ員の一人だろ」

クレスの言葉にセブは微笑を浮かべ、

「まあな……大戦終結の原因悪魔の兵器——ロストウィング——ほんの一部とはいえアレと同じOSを使ってる機体なんてよ……あの悲劇の再現しちまうかもしれないってのに……命令とあらば動くしかねえ……はっ……矛盾してるな俺は」

そうつぶやきセブはグラスにたつぷりと注がれたウィスキーを一滴残らず一気に飲み干し、再びウィスキーを注ぎ、言葉を続ける。

「戦艦撃沈数約四千、ギア・戦闘機撃墜数約一万二千——たった一機によるギアの被害——『タイプ01』が完成して量産されればどれだけの脅威になりうるか……」

——ロストウィング——

『ヘルマン投戦』においてアース連合によって開発された機体——

『ホワイトウィング』全く新しいタイプのOSを組み込んだ実験機、これが量産に移れば

戦局は一気にアース連合に優勢になると上層部はもくろんでいた、しかし——異変は最初の機動実験中に起きた、

突然の機体の暴走——実験に携わった者達に誰も生存者がいなかった為、それ以外の事は不明——

その後の『ロストウィング』は暴走を続けアース連合、スティア国を無差別に、基地を、あるいは艦隊を襲い、人々を恐怖の淵へと追いやった——その、全てを滅ぼす——『消滅』させる様な事から『ロストウィング』と呼ばれた。

戦艦の爆煙などを受け、その機体の色は白から漆黒の黒へと変化していった、まるで機械の血を浴びたかの様に——

両国とも事態の深刻さを受け、休戦——アース連合とスティア国は『ロストウィング』の討伐作戦『デス・トラップ』を発動、

これにより多大な損害を受けつつも『ロストウィング』の破壊に成功、だが両軍の受けた被害は甚大——その為休戦はその後三年続き両国の間で平和協定がなされた、その後『ロストウィング』の部位を回収し、調べた結果、原因は開発者不明のOSにある可能性が高い事が判明。

OSに不安要素があることを知りながら『ホワイトウィング』の開発を指示したアース連合の上層部は処分され、この事件は一樣の終わりを迎えた——

.....

「……なあ、このまま『タイプ01』のパイロットを続けるのか？」
長い沈黙の後口を開いたのはセブ、

「ああ、力が手に入るなら俺は悪魔にだって魂を売るさ」

悪魔——か、それをまた兵器として使う俺たちはさながら『魔王』
かもしれねえな——

暗い表情を隠しセブはクレスに向き直り、

「やっぱりお前あの事件——」

「言うなっ!!」

セブが言いかけたその時クレスは珍しく怒鳴りグラスをカウンターに叩きつけた。

目の前のバーテンはあいも変わらずグラスを拭いている。

「すまん……あの事件はお前にとっては思い出したくない事だったな」

そう言うセブの手に握られているグラスの酒は先ほどからほとんど減っていない。

カラン、コロン——

酒場の木製の扉が開きベルを鳴らし来店を伝える。

入って来たのはクレスの知った顔だった。

「レオンか？なんだお前はまだ勤務中だろ？」

セブが言い、声に気づいたレオンはカウンターへと近づき——

「報告だ」

「報告？」

オウム返しに聞くセブにレオンは頷き、
「つい今しがた民間軍隊『スペリオル』の基地『イシス』が何者か
によって占拠されたとの情報が入った」

同じ頃――『ソリオン』基地のエルセントの耳にも同じ情報が入っ
ていた――

出港

「ホントなんですか！？『イシス』が占拠されたってのは？」

エルセントの言葉を聞き驚きの声をあげるエルク。

「三日程前から連絡がつかなくなってるな、ネット上で占拠されたなんて情報が出回ってきたのでなそれで

ようやく上層部が重い腰を上げ、何が起こっているか確かめる為に偵察隊を出す事になってな」

「三日！？何を悠長なっ！」

珍しくカイトが声を荒げ、はき捨てる。

「不満かもしれんが、上層部にアレコレ言う訳にもいかんだろう、少なくとも調査には行くんだ」

「すいません、いきなり……」

カイトが謝る隣でエルクがのん気に、

「へえー、偵察に行く奴らもこりゃあ大変っすね」

「何を言ってる、エルク、カイトお前たちも行くんだ」

……………

エルセントの言葉に絶句し一瞬沈黙した後、

「うえええっ！なんで俺たちなんですか！？第一この機体どうするんですか？」

絶叫するエルク。

「今この基地に最低限の警備隊を除いてほとんど合同訓練など出でしまっている、人員が足りんのだ、我慢しろ、『イグニス』『シユテッケン』は置いていく最終調整もしなければならぬからな」

「『お前達も』という事は俺たち以外にも誰か？」

横から口を出したのはカイト。

「シアも同行する」

「うげっ、アイツもですか——俺なんか頭痛いんですけど……」

不機嫌な顔で言い訳するエルクだが、エルセントは無視し言葉を続

ける。

「準備ができ次第、Bブロックの巡洋艦『シルバー・ナイツ』のブリッジに集合——以上だ」

——いきなりの合同訓練命令の最中に『イシス』基地の占拠——何かが動いている、何かが——

エルセントは胸の内に底知れぬ不安を抱いていた。

「エルク遅いわよ、何やってんのよ」

そう言ったのはカイト達と同じ年齢だろうか、髪は栗色のロングで同じく軍服を着ている、

美人ではあるが口調はかなりきつめだ。エルクとは『スペリオル』に入ってからの中で

カイトとは幼馴染であり同じパイロットをしているが、どうにもエルクとは少々ソリが合わない所がある。

「シーアそう言うなよ、準備に色々手間取ってさ」

「どうせ、女の子達に声でも掛けてて遅くなったんでしょ」

シーアの言葉にエルクは動揺することも無く、気取った表情で指をピシッと一本立て、

「ふっ、女の子無くして俺の人生は無いつ！」

「自慢げにいうなああっ！」

どげしっ！！

メイアの蹴りがエルクの腹に直撃し、エルクはその場にくの字になってブチ倒れた。

「お前たち……どうでもいいからブリッジの前で騒ぐな……早く入れ」

頬に汗を流し、呆れた表情で言うエルセント、

「だから……嫌だって言ったのに……」

言い、ブリッジに入るメイアの後ろを腹を押さえたままエルクはついて行く、

エルク自体に問題がある事に本人は消しゴムのカス程も気づいてい

ない。

ブリッジにはカイト達を除き、六人——艦を動かす最低限の人数しかいなかった。

ブリッジの大型ディスプレイの前にエルセントが立ち、説明を始める。

「今から約十二時間後『イシス』基地のある宙域に到着する、その後エルク、カイト、シアアの三名で『フェイ』偵察装備型で警戒しつつ『イシス』に距離二千まで接近——調査、『イシス』基地宙域映像を本部に送り、その後内部を調査し、内容を報告」

「説明は以上だ、総員配置につき次第出港する」

『了解!!』

そして——『シルバー・ナイト』は出港した——『イシス』基地に起こっている事を確かめる為——

蠢く影

『シルバー・ナイト』は既に『イシス』基地の宙域の調査を開始していた。

「エネルギー反応はどうだ？」

聞くエルセント

「多少はありますが…はっきり言ってこの数値では中の人間は生きているレベルとは……生きてるとしたら宇宙服着てる事になりますし」

オペレーターが口を濁す。

「カイト、エルク、シアそちらはどうだ」

エルセントが言い『シルバー・ナイト』ブリッジの大型ディスプレイの中の一角にエルクの顔が映し出される。

「この距離から見ると限りじゃ、はっきり言って基地が襲われた感じじゃないですね戦闘の跡もないですし」

ディスプレイの別の画面が瞬いた。

「こちら、カイト機、基地遠隔監視カメラのシステムが絶断されますね」

エルクは一瞬考えたような表情を見せ、

「システムの情報は内部の人間しか知らないはず——って、事は誰かが内部に潜り込んで兵士を脅してシステムを切らせた……そう考えるなら辻褄は合うわな」

「そうだとっても、目的がわかんないわよ、いきなり基地を占拠して何か要求する訳でもなく

沈黙を保ったままなんて」

と、これはシア。

「よし、内部に——」

「『イシス』からギア発進を確認、識別『フェイ』！数十二！！エネルギー反応増大中！」

エルセントの言葉を遮ったのはオペレーターの悲痛な叫び。

DZ社製ギア『フェイ』——バランスの取れた機体で汎用性が高く多くの民間軍隊で使われている、だが同時に特徴の無い機体でもある。

「十二機：お迎えにしちゃ数が多いな」

銃口を叩くエルク。

「ああ、敵と考えるべきだろうな」

「機体内に生体反応は——無いわね、オートパイロットね」

「なら、遠慮はいらない訳だな」

そうカイトが言った次の瞬間——敵の『フェイ』の銃口が唸る。

「やっぱか！」

言ってエルクは機体を操作し軽く避けレーザーライフルを構え、ぶっ放す。

ゴウウンッ！！

放たれたレーザーはエンジンを撃ち抜き爆発を起す。

「よっしゃ、まず一機目——って、おい、数機別の方向に向かってんぞ！？」

確かに『フェイ』の十二機のうち四機がカイト達とは全く違う方向に向かっていている。

「レーダーに反応は？」

エルセントがオペレーターに問う、

「いえ、向かっている方に特に反応は……」

——！！

「『フェイ』の反応二機消えました！ポイントB—D域に戦艦クラスの砲撃反応あり！」

「何かいるぞ、警戒しろ！通信士、回線を開けるかを試してみてください」

「了解です」

「スペリオル艦からの通信です、ディウン艦長どういたします?」

「バレてしまいましたか、しかし、なんでも『フェイ』こちらに気づいたんですかね、ステルス張ってるはずでしょう?」

ディウンと呼ばれた男——年齢は二十台後半だろうか黒の長髪で体型は中肉中背で顔は爽やかな笑顔が印象的だが、その笑顔からは威圧すら感じられる。

「つ、通信はどういたします?」

少々戸惑いながらも通信士は聞き返す。

「あ、すまん、バレた以上仕方がないさ、開いてくれ」

「了解、回線開きます」

…ザッ…

「こちらは『スペリオル』第二師団所属『シルバー・ナイト』そちらの所属と目的を明かされたし」

——!!

一瞬、ディスプレイに映った顔にディウンが驚く。

映ったのは艦長と思わしき人物——ディウンの見覚えがある顔だった。

——《烈神》——エルセントⅡハイムがこんな所にお出ましとはね

——

しかし、気づかれない様に平然を装い、

「所属は『^{ガイディアン}守護神』第五機動隊『グレイゴル』艦長ディウンⅡアイト、

目的は明かせませんがそちらに危害を加える気はありません」

「目的が明かせないとはどうゆう事か」

——やっぱり、納得してくれませんか——

ディウンはあからさまに困った様な顔をし、

「こちらを上からに命令でしてね、迂闊に内容を話すわけにはいかないんですよ」

.....

「了解した、だがこれ以上の干渉は止めてもらいたい」

これ以上の制止は無駄と悟ったか答えはディウンの考えていたよりあっさりしたものだった。

「分かりました——ですがこの場は共闘した方が良いと思います
撤退しようとしても、こちらが既に攻撃を受けていますから」

すでに『イシス』からは約四十機ほど『フェイ』が出ており『グレイゴル』にも攻撃を加えている。

「分かった、だが、戦闘が終わり次第そちらは撤退してもらう、よろしいか」

「了解です、では」

事務的な言葉を残しディウンは『シルバー・ナイト』の通信を切り、新たに格納庫に通信を入れる。

そこに映し出されたギア——ZD社製ギア『サイファ』——かなりの機動性を持つ機体だが、その分扱いが難しくなっており、パイロットを選ぶ機体。

「クレス君、ライア君、『スペリオル』と共闘する事になりました、指定されたポイントに援護に回ってください、もちろん情報収集も忘れずにね」

「なんで奴らと共闘する必要があるんです？」

不満げな声をあげるクレス、

「バレてしまった以上しようがないんですよ、気に入らないかもしれませんね」

「任務……了解……」

「ライア君は素直でいいですね、クレス君とは違って」

——何故俺がこんな人形のお守りを……ちっ……

唇を噛み苛立つクレス、

「クレス君、言っておきますがライア君はそこらのパイロットとは違うんです、くれぐれもよろしく頼みますよ」

まるでクレスの心を読み取ったかのように言いニッコリ微笑むディウン。

「クレスⅡレイヴァー『サイファア』出る」

胸の中で渦巻く苛立ちを殺しながらクレスは出撃し、

「同じく：ライアⅡレグレイト『サイファア』出る…」

続いてライアも出撃する。

「こいつら数だけ居やがる！」

カイトが言い放ち『フェイ』の腰部に収納されているビームブレードの発振器を取り出され、青い刃が生み出される。

バアウツ！

振るった青い刃は敵の『フェイ』の装甲を易々と切り裂いた。

「くっそ、これで八機目！こうなったら全機撃墜してやらあ！」

エルクが言い、撃ったライフルで後ろに迫っていた一機をぶち抜いた。

「『イシス』基地には確か三百機は『フェイ』があっただと思うけど？」

ディスプレイ越しに言うシーア

「…ま、まあ根性入れれば………」

言いつつ、敵から来る銃撃をかわすエルク。

「なるかつ！その前にエネルギー切れになる！」

カイトが言う、

「じゃあ、どうすんだよ？」

「とりあえず敵の数を減らして潜入するしかないな」

「だけど、こんなに敵が群がってるんじゃ強行突破も難しいわよ!」
そうシアが言った時、エルセントからの通信が入る。

「今から『守護神』の援軍が来る、援護を受けつつ三人は『イシス』
基地内に潜入しろ」

「ええ!! な、なんでココに『守護神』の連中が!?!」

エルセントの言葉に驚くシアの機体の横を光条が過ぎ去る。

「この状況を打開してくれるなら誰でも構わん」

カイトが言い、前方からの銃撃をかわし、ライフルで一機を撃ち落
とし、後ろから迫ってきたもう一機のブレードの

攻撃をかわし、すれ違いざまにレーザーブレードで切り裂いた。

「くっ、隊長! 偵察用の装備パージしますよ、このままじゃ操縦し
づらいっすよ」

エルクが言って一機をライフルで葬る。

「仕方ない許可する」

バウウン!

激しい音と共に、カイト達の乗っている『フェイ』から偵察用の装
備が外れる。

「よっしゃ、これで身軽に——通信?」

ザアッ……

雑音混じりの通信がカイト達に入る。

「こちら『守護神』所属クレスIIレイヴァー貴隊を援護する」

そう言った男は二十歳程で顔はシュツとしており、ハンサムな部類
には入るが、その瞳は闇が渦巻いている。

「同じくライアIIレグレイト、援護する…」

もう一つの画面に映し出された男は、何処と無く雰囲気掴めない
男で、顔には表情が全く無い。

「こちら、『スペリオル』所属カイトIIセレオル、我々は今から基
地内に潜入する、援護を願う」

「了解した我々が進路を確保する、その間に潜入を願う」

「援護、感謝する」

そのカイトの言葉で通信を切り、クレスとアイラは群がる『フェイ』の軍勢に突撃する。

クレスが突撃しつつレーザーライフルを撃つ——しかし直撃はせず、右腕を破壊するだけに終わり、悠然と敵が突っ込んでくる。

「この程度っ！」

しかし機体の反応が鈍い——

——ぐっ、『タイプ01』のクセが抜けていない！

——刹那——

クレスに向かっていた『フェイ』はアイラに撃ち抜かれ宇宙の藻屑と化していた。

「油断…するな…」

「分かっている！」

クレスは苛立ちついでに後ろに迫っていた『フェイ』をレーザーライフルで撃墜する。

クレスとアイラは二機、三機——『フェイ』を撃墜してゆく、

「凄いですね…あの二機のギア」

オペレーターが感嘆の声を漏らす。

「正直、最初はたった二機かと思いましたが…これなら何とかなりそうですね」

「ああ、だが——敵になった時は脅威だろうな」

「はは、真剣な顔で言わないで下さいよ、今まで民間軍隊の間で抗争なんて例ありませんよ」

——そうだと……いいがな——

笑い飛ばすオペレーターの隣でエルセントは不安を取り除けなかった。

「それより、あのギアのデータ取っておけよ」

「了解です」

「よし、敵はいないな？」

「確認したが、この発進口からギアらしき反応は無いぜ、砲台もあらかた潰したしな」

状況が状況の為か、カイトの問いに珍しく真剣に答えるエルク

「さて、いよいよ――ね」

そう言うシーアの頬に汗が流れる。

「よし、行くぞ」

言って『イシス』基地の発進口からカイト達は潜入する。

だが――『イシス』基地内はすでに血と死臭が漂い人は肉塊と化していた――

救うべき者は既に無く

「これは……」

ギアを降りて白兵戦用の武器を装備、宇宙服を装着し基地内の調査を始めようと格納庫に降り立った時だった。

エルクは思わず基地内の光景を目の当たりにし、後ずさる。

基地内は死と血の匂いが漂い、人は肉塊と化し、まるでトマトジュースをぶちまけたかの様に空気が無いため血が大量に浮遊している。

その光景を見たシーアが思わずその場に膝をつく。

「大丈夫か？」

「う、うん……大丈夫……エルクこそ大丈夫なの？」

「初めてじゃ……無いからな」

厳しい眼差しで言うエルク。エルクやカイトはテロでの遺体処理で死体は見たことがあったが、やはり気持ちの悪いものではない、シーアは無かった為その場で思わず嗚咽する。

「とりあえず先に進むぞ、俺達にできる事は一刻も早くこんな事をやった奴らを捕まえる事だ」

怒りを瞳に宿しカイトは廊下への扉をくぐる——幾つもの扉をくぐっても、死体はあった。

ある者は背中を銃で撃たれ、ある者は腹を切り裂かれ臓器が幾つも無くなっている者と様々だった。

「これじゃ、ただの殺戮じゃねえか！」

エルクがはき捨てる。

「なんなのよ、一体……尋常じゃないわよ……こんなの……」

「司令室に行くぞ……監視システムを使って生存者を探すんだ、運がよければそこに原因を作った奴らがいるかもしれない」

カイトの言葉に二人は頷き、歩き出す。

宇宙では、ほとんどの『フェイ』が撃墜、あるいは発進する前にゲートを潰され、はもはや数えられる程に減っていた。

「クレス君、あらかた片付きました、後はあなただけです撤収してください」

「『スペリオル』の連中は放っておいて大丈夫なのか？」
言うクレスにディウンはつもの調子で、

「大丈夫ですよ、彼らもプロなんですから、まあ、こんな事でやられる様ならそれこそ『そこまでの奴だった』って事ですよ、なのであなたも早く着艦して下さい」

「分かりました……撤退します」

——さて、この事件なにやら奥が深そうです、回収したブラックボックスで何処まで分かりますかね——

「どうだ、そっちは？」

無線を通じてエルセントの声がカイトの耳に届く、約十分程前から通信をして、状況を報告しているのだが言える報告は最悪なものばかり。

「ええ、死体ばかりですよ何処も……」

カイトは司令室のコントロールパネルを操作し、基地内の監視カメラの映像を確認するが、映し出されるのはやはり死体——無論、司令室にも幾つもあった。

「カイト、監視カメラの録画映像今から流すぞ」

「頼む」

エルクがパネルを操作し司令室のメインディスプレイが分割され幾つもの映像が流れる、そこには資料を片手に行ったり来たりする者、上司に怒鳴られやる気無くし机にうなだれている者が居たり

するだけで、いたって平和な光景が広がっていた。

「これ、ホントに連絡がつかなくなる直前の映像か？」

エルクが訝った表情を見せる。

「そのはずだけど……あれ？映像が……」

映像は途中で途切れ、後は黒く塗り潰された映像が流れるばかり。

「どうやら、襲った相手も真実を簡単には明かしてくれないらしいな」

「『スペリオル』に恨みでもある奴らの仕業？」

言うシーアにエルクが首を横に振り、

「それなら声明ぐらい出すはずだろ？『俺達がやった』とかよ、でなきゃタダの自己満足でしかないぜ？」

「そっか…それもそうね」

と、シーアが言った瞬間――

けたたましい警告音が響き、赤色灯が光だす。

「なんだっ!？」

エルクは手元のコントロールパネルを操作し警告の原因を探る。

「おい、おい、まずいぜ！ジェネレーターに過剰に負担が掛かってる！――制御プログラムは……くそっ！だめだ機能しない！誰がこんな事を……」

「どうなるのよ？一体？」

「ジェネレーターに負担が掛かってるなら爆発するな……仕方ないこの場を放棄するぞ」

「そんな、まだほとんど調べてないのに!」

シーアがフリンスの言葉に反論するが……

「まとめて返してやればいいさ、こんな事をしでかした奴らにな」
エルクが冷静にたしなめ――それにシーアも頷く。

「誰か知らねえが、この借りは必ずっ……!」

エルクはそう決意しカイト達と共に司令室を後にする。

「撤退準備急げ！」

エルセントの声が艦内放送で流れる、最低限の人数しか乗せていない為、乗員はあちこち急がしく飛び回っている。

「『ガーディアン』の戦艦撤退していきます、どういたします？」
慌てるオペレーターにエルセントは冷静な口調で、

「放っておけ、構っている暇はない、それよりも『イシス』基地からカイト達はまだか？」

脱出の連絡を受けてから約十分、脱出するには十分な時間である、しかし――

「いえ、未だに反応ありません、通信も応答なしです」
だが、帰ってきた答えは期待とは違うものだった。

「仕方が無い、いつでも撤退できるように準備を万全にしておけ、カイト、エルク、シアアの三名を収容次第撤退する」

「彼らが帰ってくるという保障は……」

萎縮しながらオペレーターが言うが、エルセントは勝ち誇った様な笑みを浮かべ、

「帰ってくるさ、必ず――アイツらならな」

その頃、カイト達は脱出しようと格納庫へと、来た道に戻っていた時だった。

青白い閃光がカイト達の側をすぎた――『ガード』この基地の自動警備ロボットである。

「なっ！」

カイトは身を伏せ、通路の右側にあった部屋にエルクとシアア達と飛び入る。

そして、宇宙服に付いているバッテリーに、とある武器から出ているコードを繋ぐ、

ガンブレード。

その名の通レーザーガンとして、モードを切り替えることによりレーザーソードとしても使える武器である。

しかし、欠点もある、長く使っていると出力が不安定になりやすい為、連続しての使用に向かない事。

カイトはガンブレードをソードに切り替え部屋を飛び出す。

「ダメ！先に撃たれちゃう！」

だが、カイトはシアの制止も聞かず、突っ込む。

『ガード』の放ったビームガンをソードで上手く弾き、姿勢を低くし、加速をかける。

次のレーザーがカイトの頭上をわずかにかすめ、次の瞬間――

『ガード』は腰の辺りから一瞬にして真つ二つに両断され、鈍い音をたて、上半身が廊下へと崩れ落ちる。

「行くぞ」

「う、うん」

カイトの尋常ならざる動きに驚きつつ頷くシア、その隣でエルクは『俺の出番は無しかい！』といった顔をしている。

だが、次の瞬間格納庫へ通じる道は馬鹿デカイ音と共に降りてきた分厚いシャッターによって行く手をふさがれる、が――

「こんなもん！」

言って、エルクの振るったガンブレードによって分厚いシャッターは人が通れる程の歪な穴を作り出した。

しかし、くぐると、すぐ先をまたも分厚いシャッターが塞いでいた、次も、そのまた次も。

「こりゃあ、時間が掛かるな……運が悪けりゃココが俺達の墓場かもなあ……」

不安げな半ば諦めた表情を浮かべるエルクだった。

「基地内のエネルギー指数既にレッドです！艦長、これ以上は！」
悲鳴に近い声でオペレーターが叫ぶ、

「いや、来たぞ」

エルセントが言い、ディスプレイに映し出される三つの機体――

「隊長、待たせましたね、着艦しますよ」

ディスプレイにエルクの顔が映し出され、ブリッジ内に安堵の声が漏れる。

「了解した、着艦し次第撤退する、急げ」

「了解！着艦します」

言ってカイト達は加速をかけ『シルバー・ナイト』へと降り立つ。

「『イシス』の爆発を確認！」

ブリッジではオペレーターの悲痛な報告が届く、

「前進全速！爆発の影響域から離脱しろ！」

エルセントの言葉と共に『シルバー・ナイト』は爆発に飲み込まれ崩れ逝く『イシス』を後ろに見つつ、離脱するのだった。

何処とも知れぬ場所で、十二、三歳程の一人の少年がイシス宙域での映像を眺めている。

——エルセントⅡハイムを誘き出す目的だったけど——

——思わぬ獲物が掛かったね、カイトⅡセレオル——おそらく彼が……もう少し調査が必要だね——

そうつぶやくと映像は消え、光を失った空間は闇に包まれた。

現なる悪夢、夢なる悪夢

「援軍は！？」

民間軍隊、『白騎士』（ヴァイスリッター）の基地が襲撃を受けたのは『イシス』基地の出来事から一週間経った日の事だった。

「ダメです！艦長、我が艦は完全に孤立しました！」

白騎士の艦『スパイラル・シー』のオペレーターは叫んでいた。確かに急襲された為、最初は慌てたが、敵の数はたかが艦が二十隻とギアが百程、それに対してこちらの数は艦だけで三百——ギアも合わせるなら

その数は千を軽く超える。

楽な相手だと思った、だが——その自信は射程範囲外からの砲撃によって旗艦を撃沈され混乱へと変わった。

一時間も経たぬ内に艦とギアの数は一足らずとなり、部隊は完全に分断されていた。

しかし、混乱だけがコレだけの事態を招いたのでは無い——違いすぎるのだ、艦やギアの性能が——

明らかに命中しているのにほとんど船体に被害を受けない艦、ギアの異常な程の火力と機動性——

それは千をも超える戦力差を埋めるほどの力だった。

「怯むな！撃たれれば終わ리と思え！」

「は、はい！」

言って、砲撃手が手元のパネルを操作し、主砲を発射させる。

——どうなっている？一体なんなのだ奴らは！？——

その時、ある事件の話が艦長の頭に過ぎる。

五十年前に起こったという謎の高性能艦との戦闘の話——

攻撃を加えた後、突然、謎のメッセージを残し消えた艦——

誰もが笑い話として、冗談として語った一つのヨタ話。

自分もそう思っていた——つい先程まで。

「まさかつ！ そんな馬鹿なっ！？」

しかし、その真実を『スパイラル・シー』の艦長が知る事はなく――『白騎士』第七師団の連絡は程なく途絶えた。

轟音をたてて、格納庫の壁の一部に穴が空き、焼け爛れる、それに驚いた整備士達が慌てふためきその場所から急いで離れる。

「エルク！何をやっている！」

エルセントの罵声がスピーカーを通して実験室に響き渡る。

「す、すみません！」

どうやら、何時もの調子で操作していて『イグニス』のライフルを暴発させたらしい。

「試験運用なんだぞ！もっと慎重に行え！」

「……は、はい……」

「いやあ、食堂での休憩は和むね」

言って運ばれてきた定食のコンソメスープをのん気にすするエルクにシーアはムツとした表情で、

「あのねえ！あんたのせいで訓練中止になったのよ！少しは反省したらどうなの！？」

「いやあ、俺の……辞書に……ング、ング……旨いっ！」

『食べながら喋るなっ！』

カイトとシーアのツツコミが見事にハモった。

――モグ、モグ……

しかし、エルクは食べ続け――

シーアの中で何かが音をたてて切れた。

「あんたねええええっ！！」

「うわわわっ！俺が悪かった、悪かったからあー！！」

近場にあった椅子を頭上で思い切り振りかぶられ、ほとんど半泣きで謝るエルク。

「ったく……」

ほとんど男口調で言い、椅子を元に戻し、不機嫌ながらも座るシア。

——こいつら、毎日の様にこんな事やってよく飽きんな……
はたで見えて思わず心の中でつぶやくカイト。

「それよりもだ」

一息つきカイトは運ばれてきた食事をどけ、机で手を組み、真剣になり、

「『イシス』基地で起こった事、どう思う？」

エルクはさして考えたふうでもなく、頭を掻きながら。

「どうって、言われてもなあ……」

当の『イシス』基地は吹っ飛んじまったし」

「俺の考えを言ってみるけど、いいか？」

「ああ、頭使うのは苦手だし、頼むわ」

シアは『イシス』基地での事がよほどショックだったのか俯き、何も言わない。

「仮説として三つ立ててみる、一つ、テロリストの仕業という線、あれだけの死体も民間軍隊の見せしめにやった事なら説明もつく、しかし、それなら犯行声明ぐらい出すはずだ、ギアもあんな自分達に利益の無い戦闘に使ったのは変だ、資金源にするなり自分たちの戦力にできたはずだしな。」

二つ、内乱が起きて基地内で戦闘が起ったという線、内部の関係者なら連絡やカメラの映像が消去されていたのも説明がつく、しかし生存者は居なかったし、基地から脱出した形跡はなかった。それなら共倒れて事になるんだが、最後の一人まで共倒れてのは可能性的には低い。

三つ、それ以外の可能性だ」

「おいおい、最後はずいぶんアバウトだな、しかもどれも完全なも

のじゃないしょ」

苦笑混じりにエルクが言う

「さすがに基地丸ごとが殺人の舞台になった例なんて無いからな。完全な仮説を求める方が無理があるってもんだろ」

「ま、確かにそうだな——でもどれも当てはまらないのが『フェイ』の無駄遣いだな」

「データを入手する為だった……」

「それは効率悪すぎだろ、俺達三人のデータ取る為に使ったとは思えないしょ……襲った奴が狂ってた奴とか……」

「そんな奴らで基地をあれだけ制圧できるのか？」

……………

二人共腕を組んで考え込んでしまう。

「って、俺達だけで考えて答えのなる話じゃないよな……一応調査団派遣してるみたいだし、そのうち犯人も分かるだろ」

「そういや、エルク、始末書提出したのか？」

思い出したように言ったカイトの言葉でエルクの表情が青ざめる。

「ああああっ、忘れてたあああっ！ すまん、また後でな！」

を言い、食堂の自動ドアに足を躓かせながらそそくさと出て行った。

シーアはカイトに向き直り、

「始末書くらいでなんであんなに慌ててたの？」

「ああ、あいつ特別に始末書忘れる毎に残業一時間増えるからな」

「そう……なんだ……日頃の行いが悪いって怖いわねー」

——俺は、お前のキレた時の方が怖いけどな……

と、頬に汗を一筋流し、まだほんのり温かい定食をつつきながら、口には出さずツツコミを入れるカイトだった。

何故誰モ信ジナイノ？

『俺は一人で十分だ』

傷ツクノガ怖イカラ？

『違う！』

誰カガ傷ツクノヲ見ルノガ嫌ダカラ？

『違う！！』

君ハアイツト同ジダヨ

『違う！！！！ お前は、誰なんだ！？』

僕ハ君ダヨ、君ハ僕デ僕ハ君、ナノニ何デ僕ヲ否定スルノ？

『俺は、お前を認めない！ お前は俺じゃない！』

僕ハ――

『やめろ！』

紛レモ無ク――

『言うんじゃない！』

三年前ノ君ダヨ――

「うわ！ ……って、クレスか……ビククリさせるな、明かりくらいつけるよ」

そう、言い手探りで電子パネルのスイッチを手で操作し明かりをつけるセブ、

「ああ……」

クレスはただ一人、リフレッシュルームのソファ―に座っていた。
「お前こそ、こんな時間にどうしたんだ？」

テーブルを挟んだ向かい側の皮製のソファ―に乱暴に座るとセブは胸のポケットからタバコを取り出し、備え付けのライターで火をつける。

「ああ、まいどの事『タイプ01』のシステム調整さ、」

そう言うセブの表情は疲れており、軍服に精彩は無い。

吹いた白い煙が空中に巻き上がり換気口に吸い込まれ消える。

「なあ、止めたくならないのか……？」

しばらく経って口を開いたのはクレスだった。

フツ、と小さく苦笑し、

「お前も知ってるだろ？ 俺は結婚したばかりだ、来月には子供も生まれる、守らなきゃならないものがあるんだ。

止める訳にはいかんさ」

「守るもの、か……セブ、お前は無くすなよ、絶対に……」

「お前、何を大げさ——」

クレスの目が冗談ではない事に気づき、

「何言ってるんだ、俺はお前の親友だろ？」

セブはガラにもなく言った台詞に少し恥ずかしさを隠すように煙草を思いっきり吹かした。

「俺は……お前を親友と思っていない……俺は一人でいい——これからも」

「クレス……」

クレスが酷く悲しげな顔をしたのにセブは気づいていた、その理由も——

小さな呻きを漏らし、クレスは思い出していた、全てを捨てたはずの過去——しかし、未だに夢を見る、終わったはずの事を——

——自分が仲間を手に掛けた過去を——

その時クレスはただ齒を噛みしめる事しか出来なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1515a/>

宇宙を駆ける光

2010年10月9日00時10分発行